

大木隆生

東京慈恵会医科大学
血管外科教授

「一日に幾度も手術着に着替えるので、カットシャツのボタンは一つおきにかけている」。使命感あるまなざしでそう語るのは、大木隆生慈恵医大教授。今も年間300件以上の手術をこなし、その治療の最終ゴールを、患者の満足度に置いている。16年前にNHKの『プロフェッショナル 仕事の流儀』が治療現場に密着。80代の女性が大動脈疾患の手術を受ける場面があったのだが、患者は他病院で手術困難と告げられていつ破裂するか分からない大動脈瘤を抱え絶望の淵にあった。その患者の心に教授は寄り添い、「手術はできます。一緒に頑張りましょう」と優しく話しかける。だが、願いはかなわず手術後に死亡。ディレクターは握り直しを提案したが、「手術がいつもうまくいくわけじゃない。成功例だけを取り上げることさらに医療の安全神話が加速する。事実を知ってもらうことも必要」との大木教授の言葉でそのまま放映に。異例の結末が大きな反響を呼んだ。後日、その家族が大学を訪ねて、「手術室に向かう時、母は笑顔でした。絶望していた母の人生の最後に笑顔と希望を与えてくれた」と感謝された。

「患者は亡くなったが、これをもって失敗だったとは言い切れない。ここに僕の医療の一つの本質があります」。大木教授は医療の不確実性から逃げず、リスクを厭うことなく、パッションを持って勇氣ある医療を実践し、患者の心に光を与え続けている。

既成概念にとらわれない意識改革で 母校の外科医局を再建 トキメキを追い求める 現代版ブラック・ジャックの挑戦は続く

血管外科分野の世界的名医である大木隆生氏は、米国での破格の待遇を捨てて2006年に帰国し、苦境に喘いでいた母校・東京慈恵会医科大学外科医局を「日本の村社会」をモデルに立て直しに取り組み、見事に成功させた。

また、重症患者の最後の砦となって手術に臨む一方で、志ある外科医を育て続けている。

医師・研究者・教育者として第一線に立ち続ける大木氏に、今日までの歩みと、あるべき医師の姿、そして日本の医療現場の課題について聞いた。

外科医を目指す原点にあった ブラック・ジャックへの憧れ

伊藤 大木隆生先生は血管外科の名医として世界に知られるとともに、東京慈恵会医科大学教授、さらに外科の統括責任者として、極めてご多忙の日々を過ごしていらっしゃいます。まずは先生が外科医になられた理由からお聞かせいただけますか。

大木 それはもう、極めてシンプルなんです。僕は子どもの時から、何となく人生に疑問を持っています。哲学者ではないですが、人は何のために生ま

れ、何のために死んでいくのかとか、学校の勉強に何の意味があるのかとか。大げさに言うところ落ちこぼれで、決して優等生ではなかったです。自分の人生の目標が分からないままに過ごしていました。スポーツや釣りは大好きで、友だちと遊ぶのは楽しかったのですが、学校に通って勉強することに對して非常に疑問がありました。だから勉強好きの友だちのことが不思議でした。

僕は商社マンだった父親の仕事の関係で小学校1年から中学2年までの8年間をイギリスとベルギーで過ごしたので、英語とフランス語はネイティブ並みに話せました。帰国後に入学した中学校は英語と

フランス語を教えていたので、クラスメイトが困っていたのです。僕は両方とも得意だったので手伝ってあげると、とても喜ばれました。その時に、人に喜ばれることはいいなと思ったのです。それで先生に、人に喜ばれる職業は何かと尋ねたら、「医者が一番いいんじゃないか」と。それを聞いて「分かりました。僕、医者になります」と即決しました。その時から勉強に対する姿勢も変わりましたね。

伊藤 医師の中でも、明確に外科医を目指された時期はいつ頃ですか。

大木 医学部受験を決めた高校生の頃に外科系医師と決め、左手でお箸を使うなどのトレーニングすら